

日本英文学会九州支部第 78 回大会

期日 2025 年（令和 7 年）
10 月 25 日（土）・26 日（日）

場所 鹿児島大学郡元キャンパス

（鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号）

日本英文学会九州支部

〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町 1-1

福岡教育大学教育学部

後藤美映研究室内

E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com

HP: <https://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2025-26 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

秋好 礼子 (福岡大学)
鶴飼 信光 (九州大学)
大島 由起子 (福岡大学)
後藤 美映 (福岡教育大学)
小林 潤司 (鹿児島国際大学)
高野 泰志 (九州大学)
竹内 勝徳 (鹿児島大学)
竹安 大 (福岡大学)
鶴田 学 (福岡大学)
中村 嘉雄 (九州大学)
西岡 宣明 (九州大学)
前田 雅子 (九州大学)
松元 浩一 (長崎大学)
宮川 美佐子 (福岡女子大学)
村尾 治彦 (熊本県立大学)

2025 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	後藤 美映
副支部長	中村 嘉雄
『九州英文学研究』編集委員長	竹内 勝徳
事務局長	鶴田 学
書記	西村 恵
書記	坂井 隆
書記	吉村 理一
書記	竹安 大

2025 年度 日本英文学会九州支部第 78 回大会 開催校委員一覧

竹内勝徳(開催校責任者)、末松信子、千代田夏夫、宮元創、大和高行
開催協力校(志學館大学)委員 高根 廣大

2025 年 日本英文学会九州支部第 78 回大会 開催会場について

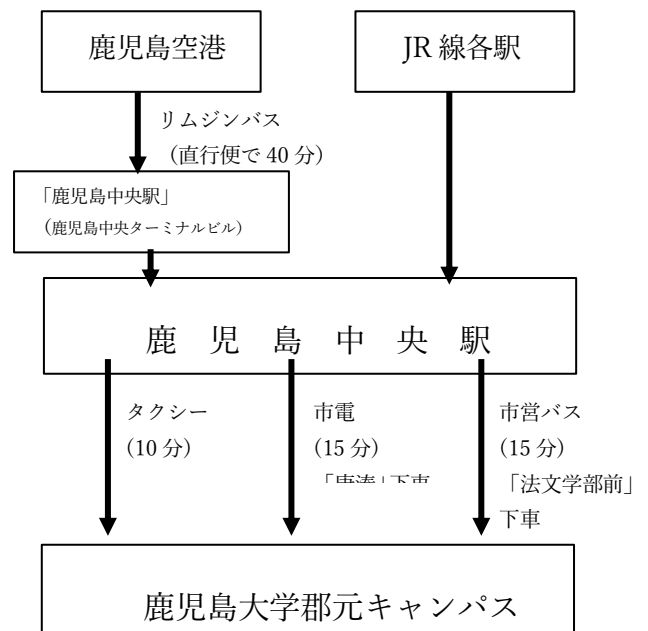
1. 日時・会場

日時：2025 年 10 月 25 日（土）・26 日（日）

会場：鹿児島大学郡元キャンパス（〒890-8580 鹿児島市郡元1丁目21番24号）

共通教育棟 1 号館・総合教育研究棟

2. アクセスと会場マップ



アクセスに利用できるバス・市電路線と停留所

市電：「鹿児島中央駅」より「郡元行き」で「唐湊」下車

市営バス：「鹿児島中央駅」東15乗り場より11番線「鴨池港行き」
に乗車し、「法学部前」で下車

鹿児島中央駅桜島口(東口)前 バス乗り場・電停マップ



(ご注意)

●車でお越しになる場合は、25日(土)、26日(日)ともに、工学部の稲盛会館側ゲートから入っていただき、係に「英文学会九州支部大会関係者」とお声かけ下さい。25日は9時30分から18時、26日は9時30分から15時30分の間に出入構ください。東側の正門からは入れませんのでご注意ください。駐車スペースが限られますので、できる限り公共交通機関のご利用をお願いいたします。

●宿泊施設情報については、下記の日本英文学会九州支部のホームページをご覧ください。

<https://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>



日本英文学会九州支部ホームページ QR コード

開催期間中の食事と懇親会について

会場近くの以下のレストランや学食が土曜日のみ営業しています。周辺には飲食店やコンビニがありますので、ご利用ください。

- ・稲盛記念館 1階「フードコート (Food Cafe KADAI)」10時30分から15時30分
- ・稲盛記念館 2階「ベジマルシェ'19」11時から15時(最終入店14時)
- ・「中央食堂」11時から14時

26日(日)の昼食はご準備いただくか、下記のQRコード、または、URLから事前にお弁当(お茶付1,000円(税込))をご予約ください。また、25日(土)18時よりキャンパス内の学習交流プラザ1階ラウンジにて懇親会(一般会員5000円、学生会員3000円)を開催いたします。その参加についても同じフォームから申し込みください。締め切りは10月14日(火)とさせていただきます。

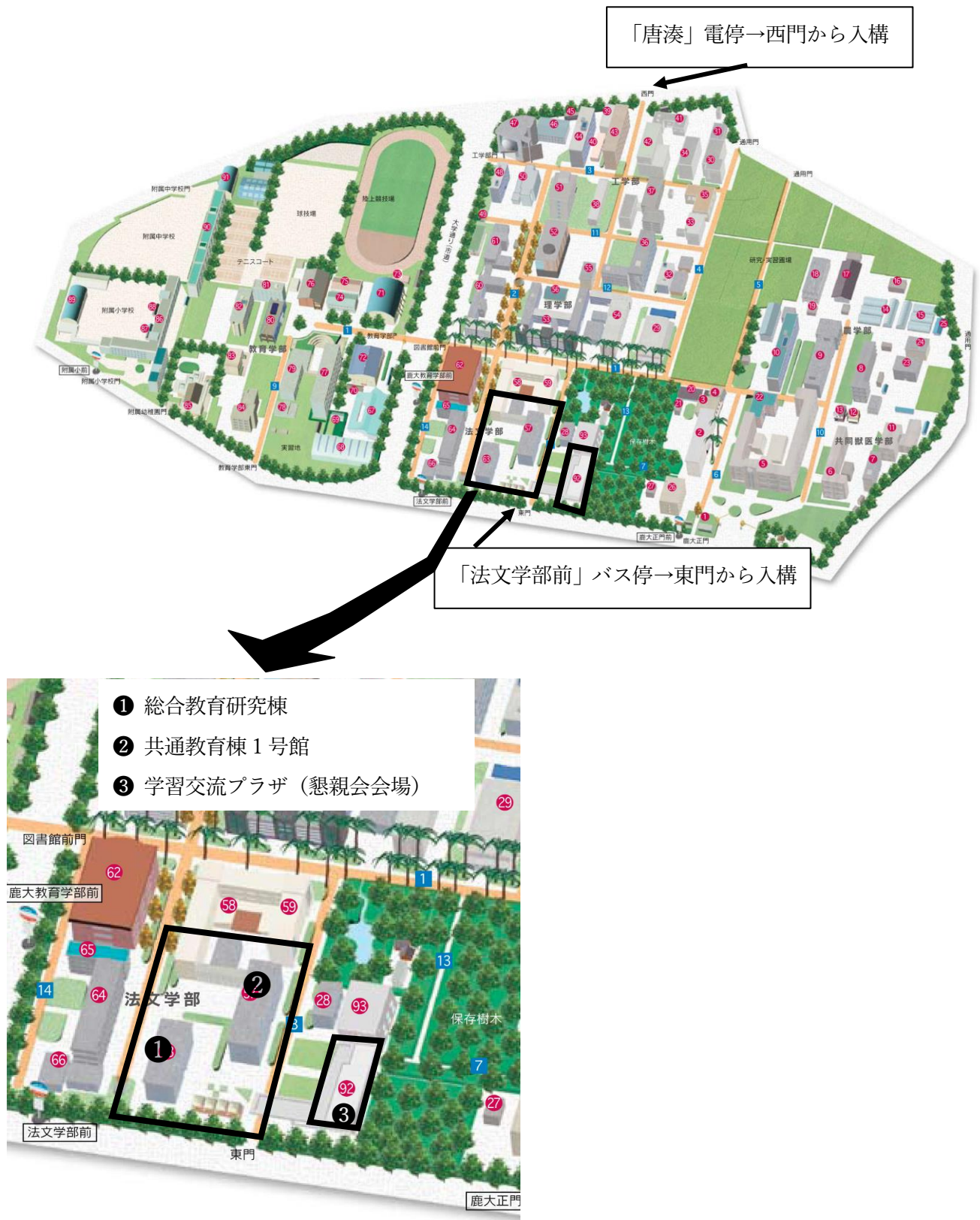
●弁当・懇親会予約用 QR コード



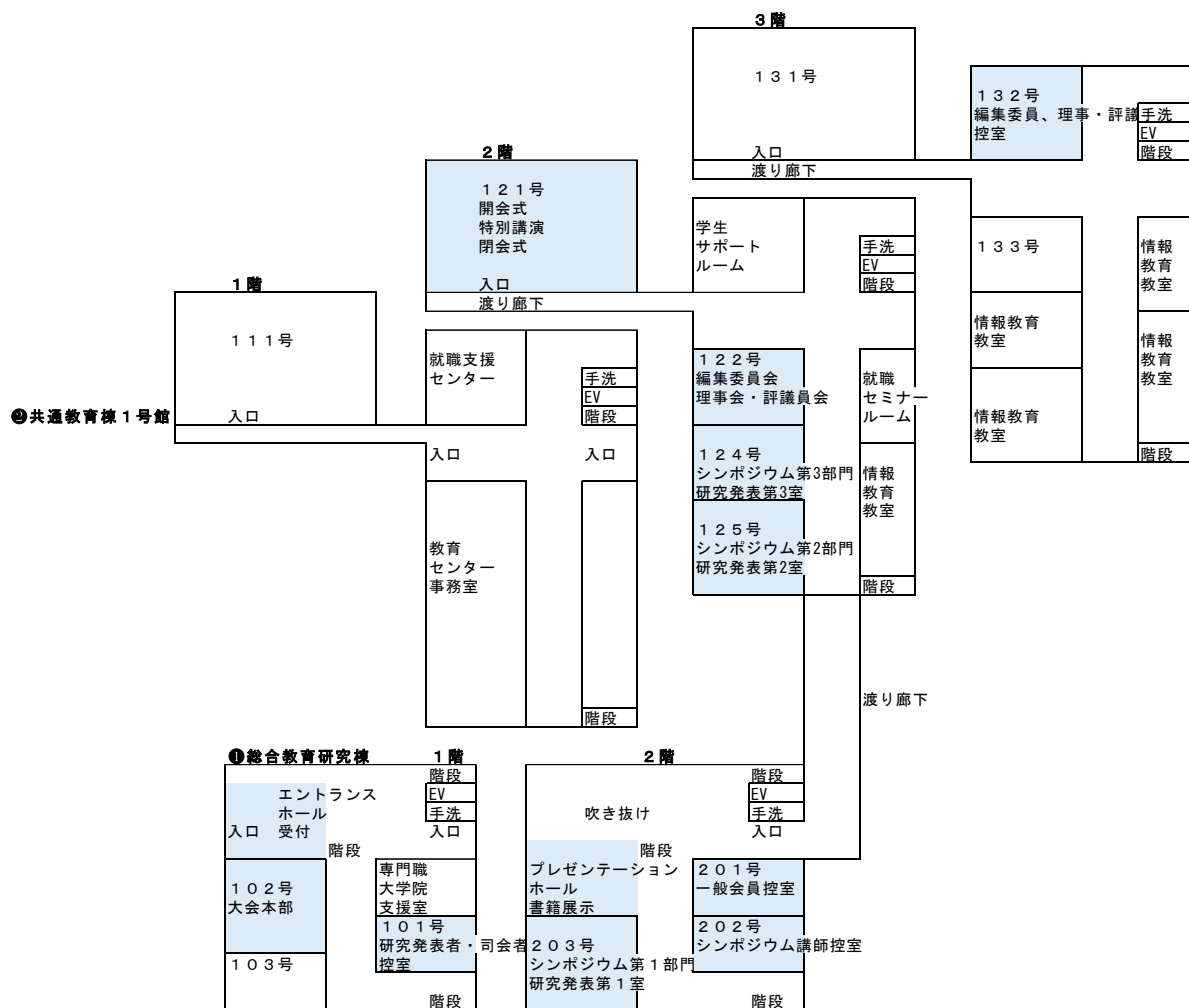
●弁当・懇親会予約用リンク

<https://forms.gle/ignno8LQgubxZL3y6>

鹿児島大学キャンパス案内図



会場案内（講義棟平面図）



大会本部：総合教育研究棟 102 講義室

編集委員会、理事会・評議員会：共通教育棟 1 号館 122 号教室

編集委員、理事・評議員控室：共通教育棟 1 号館 132 号教室

受付：総合教育研究棟 1 階エントランスホール

書籍展示会場：総合教育研究棟 2 階プレゼンテーションホール

開会式・特別講演・閉会式：共通教育棟 1 号館 121 号教室

シンポジウム第 1 部門（イギリス文学）：総合教育研究棟 203 講義室

シンポジウム第 2 部門（アメリカ文学）：共通教育棟 1 号館 125 号教室

シンポジウム第 3 部門（英語学）：共通教育棟 1 号館 124 号教室

研究発表第 1 室（イギリス文学）：総合教育研究棟 203 講義室

研究発表第 2 室（1 日目：アメリカ文学 2 日目：英語学）：共通教育棟 1 号館 125 号教室

研究発表第 3 室（英語学）：共通教育棟 1 号館 124 号教室

研究発表者・司会者控室：総合教育研究棟 101 講義室

シンポジウム講師控室：総合教育研究棟 202 号講義室

一般会員控室：総合教育研究棟 201 講義室

大会日程

10月25日(土)

開 会 式 (13時)

共通教育棟1号館121号教室

研 究 発 表 (①13時30分 ②14時10分)

第1室(イギリス文学)

総合教育研究棟203講義室

第2室(アメリカ文学)

共通教育棟1号館125号教室

第3室(英 語 学)

共通教育棟1号館124号教室

シンポジウム(15時00分～17時30分)

第1部門(イギリス文学)

総合教育研究棟203講義室

第2部門(アメリカ文学)

共通教育棟1号館125号教室

第3部門(英 語 学)

共通教育棟1号館124号教室

懇 親 会 (18時00分～20時00分)(会費 5,000円 学生 3,000円)

10月26日(日)

研 究 発 表 (①10時00分 ②10時40分 ③11時20分)

第1室(イギリス文学)

総合教育研究棟203講義室

第2室(英 語 学)

共通教育棟1号館125号教室

第3室(英 語 学)

共通教育棟1号館124号教室

特 別 講 演 (13時30分)

共通教育棟1号館121号教室

閉 会 式 (15時00分)

共通教育棟1号館121号教室

受付

総合教育研究棟1階エントランスホール

研究発表者・司会者控室

総合教育研究棟101講義室

シンポジウム講師控室

総合教育研究棟202講義室

一般会員控室

総合教育研究棟201講義室

書籍展示会場

総合教育研究棟2階プレゼンテーションホール

大会本部

総合教育研究棟102講義室

日本英文学会九州支部第 78 回大会プログラム

日 時：2025 年 10 月 25 日（土）・26 日（日）

場 所：鹿児島大学郡元キャンパス

第 1 日 10 月 25 日（土）

（受付は正午より、総合教育研究棟 1 階エントランスホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13 時より（共通教育棟 1 号館 121 号教室）

	司会・福岡大学准教授	坂井 隆
開会の辞	支部長・福岡教育大学教授	後藤 美映
開催校挨拶	鹿児島大学理事・副学長	有倉 巳幸
開催校案内	鹿児島大学教授	大和 高行
事務局報告	事務局長・福岡大学教授	鶴田 学
優秀論文賞等選考報告	編集委員長・鹿児島大学教授	竹内 勝徳

研究発表（①13 時 30 分 ②14 時 10 分）

第 1 室（総合教育研究棟 203 講義室）

司会 久留米大学准教授 田中優子

1. 場所に縛られる女性たち——ヴァージニア・ウルフの *To the Lighthouse* におけるラムジー夫人の再解釈
九州大学大学院博士後期課程 伊瀬知ひとみ

司会 帝京大学准教授 三木菜緒美

2. 日本の民俗学的国家形成へのアイルランドからの影響——イエイツ、ハーン、柳田
北九州市立大学大学院博士後期課程 西村昌記

第 2 室（共通教育棟 1 号館 125 号教室）

司会 福岡大学教授 高橋美知子

1. “Mixing Memory and Desire” ——J. D. サリンジャーの「ガラス家の物語」における「時間」
九州大学大学院修士課程 増田樹理菜

司会 鹿児島大学教授 竹内勝徳

2. 19世紀アメリカの初期大学小説群——規律に従わない学生たち

(招待発表) 九州工業大学教授 大野瀬津子

第3室 (共通教育棟1号館124号教室)

司会 宮崎公立大学教授 福田稔

1. tough 構文における基底生成分析の再考

九州大学大学院修士課程 知京健真

司会 宮崎公立大学教授 福田稔

2. ボックス理論と θ 位置

九州大学准教授 大塚知昇

東京理科大学准教授 菅野悟

中部大学講師 田中祐太

藤田医科大学准教授 近藤亮一

シンポジウム (15時00分～17時30分)

第1部門 「イギリス文学」(総合教育研究棟203講義室)

百年後の今、ヴァージニア・ウルフを読み直す

司会・講師 九州大学教授 鶴飼信光

講師 福岡工業大学教授 原田寛子

講師 北九州工業高等専門学校講師 原田洋海

講師 福岡大学准教授 岩崎雅之

第2部門 「アメリカ文学」(共通教育棟1号館125号教室)

可視／不可視のナラティブ

司会・講師 琉球大学准教授 小林正臣

講師 西南学院大学教授 藤野功一

講師 九州工業大学准教授 鈴木一生

講師 順天堂大学助教 河野世莉奈

第3部門「英語学」(共通教育棟1号館124号教室)

言語研究における多因子研究

司会・講師 北九州市立大学准教授 木山直毅

講師 桃山学院大学准教授 森下裕三

講師 東京農業大学助教 徳永和博

懇親会(18時00分～20時00分)

場所：鹿児島大学学習交流プラザ1階ラウンジ (会費 5,000円 学生 3,000円)

第2日 10月26日(日)

(受付は、総合教育研究棟1階エントランスホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表(①10時00分 ②10時40分 ③11時20分)

第1室(総合教育研究棟203講義室)

司会 志學館大学准教授 高根広大

1. 2024-2025年シーズンにおけるシェイクスピア上演史(翻案を含む)——色彩のもたらす効果を中心に
鹿児島大学大学院博士前期課程 塗木さくら

司会 宮崎公立大学准教授 村上幸太郎

2. 「石を投げつけられた」者たちによる逆襲——フェイギン、スクルージ、クウィルプにみるディケンズ
文学における「ザアカイ表象」から浮かび上がる群集心理

北九州市立大学大学院博士後期課程 内屋敷強

司会 宮崎産業経営大学教授 安井誠

3. ブルームがモリーの朝食を作るのはなぜか——ケルト神話から読み解く『ユリシーズ』

(招待発表) 宮崎大学准教授 新名桂子

第2室（共通教育棟1号館125号教室）

司会 九州共立大学教授 黒木隆善

1. ECM 補文節における統語的構造の問題について

九州大学大学院修士課程 中山凌太

司会 産業医科大学准教授 田中公介

2. 重名詞句転移における前置詞残留禁止の問題について

九州大学大学院修士課程 平野湧久

司会 産業医科大学准教授 田中公介

3. 日本語の終助詞ワと英語の非標準的動詞s 標示が持つ談話的意味と社会的意味——終助詞と屈折標示の カートグラフィー分析

（招待発表）西南学院大学教授 谷川晋一

第3室（共通教育棟1号館124号教室）

司会 産業医科大学講師 下仮屋翔

1. 分詞構文の統語的意味的分類に関して

九州大学大学院修士課程 永松尚子

司会 産業医科大学講師 下仮屋翔

2. 対格動名詞の格付与について

九州大学大学院修士課程 白木佳帆

司会 福岡大学教授 竹安大

3. 学習者による英語学習アプリ開発を通じたアクティブラーニング

九州ルーテル学院大学講師 山本幹樹

九州ルーテル学院大学4年 田中聖和

九州ルーテル学院大学職員 田中健久

特別講演 13時30分より (共通教育棟1号館121号教室)

司会 鹿児島国際大学教授 小林潤司

シェイクスピアに於ける幻想と現実の問題——『冬物語』の affection を手がかりに

東京大学教授 河合祥一郎

閉会式 15時00分より (共通教育棟1号館121号教室)

挨拶

支部長・福岡教育大学教授 後藤美映

〈第1日〉10月25日（土）

研 究 発 表

第 1 室（総合教育研究棟 203 講義室）

司会 久留米大学准教授 田中 優子

1. 場所に縛られる女性たち——ヴァージニア・ウルフの *To the Lighthouse* におけるラムジー夫人の再解釈

九州大学大学院博士後期課程 伊瀬知 ひとみ

Virginia Woolf の *To the Lighthouse* は、ラムジー一家の日常と灯台への旅を描いた作品であり、これまで「家庭の天使」像、灯台の象徴性、フェミニズム批評など様々なアプローチがなされてきた。本発表では、ハーバーマスなどの公共圏理論を用いながら、ラムジー夫人の影響力和場所性に着目する。18世紀イギリスでは官/国家領域、公共圏、準公共圏、親密圏が形成され、女性たちは親密圏と準公共圏内でのみ活動可能だった。本作でもその構造は維持されている。ラムジー夫人は家庭内では絶大な影響力を持ち、晩餐会での采配は公共圏での男性の役割と同等である。しかし、家庭を離れるとその権力は過小評価され、準公共圏内の慈善活動中に抱く社会問題への関心も誰にも理解されない。つまり、夫人の振る舞いは全領域を貫くものの、女性の活動場所の制約により、その影響力は不可視化される。従来の家庭対公共圏という二元論を超え、夫人の権力と場所性の複雑な関係を分析していく。

司会 帝京大学准教授 三木 菜緒美

2. 日本の民俗学的国家形成へのアイルランドからの影響——イエイツ、ハーン、柳田

北九州市立大学大学院博士後期課程 西村 昌記

本発表では、19世紀末から20世紀初頭にかけてアイルランド文芸復興運動において結実した民俗学的な文学スタイルが、W.B.イエイツ (W. B. Yeats) からラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn) を経由し、日本の柳田國男に受け継がれた系譜的因果関係に着目し、日本民俗学の源流へのアイルランドからの影響を探る。イエイツは、アイルランドの田舎に語り継がれる、民話に残る断片的痕跡としての記憶に基づいて国家形成を展

開していく。この民話を引き込んで描き出される文学作品を、日本を舞台に紡いだのがハーンであったわけだが、この動きは柳田によって継承される。本発表ではこの系譜的影響に着目すると同時に、アイルランドと日本が共有する「死者たちの記憶と結びついた風景」を意味する風景感覚としての幽景 (ghost-scape) と、その世界観を紡ぎ出す根本思想である「幽霊的存在」 (something ghostly) に注目し、イエイツの『ケルトの薄明』 (*The Celtic Twilight*) と柳田の『遠野物語』の間にある共鳴的類似性を紐解く。

第 2 室 (共通教育棟 1 号館 125 号教室)

司会 福岡大学教授 高橋 美知子

1. “Mixing Memory and Desire” ——J. D.サリンジャーの「ガラス家の物語」における「時間」

九州大学大学院修士課程 増田 樹理菜

本研究は、J.D.サリンジャーの物語群「ガラス家の物語」を時間という観点から分析し、過去の出来事や記憶が登場人物たちにどのような影響をもたらすのかを明らかにする。この物語群は、ガラス家の神童七人兄弟の中でも特に優秀な長兄シーモアの自殺を軸として、その余波や残された兄弟の変化を描いている。従来の研究では、東洋思想や宗教的な祈り、戦争によるトラウマといった観点から分析されてきたが、時間に着目した研究は多くない。時間は人間の生における重要な軸のひとつであり、時間という観点から作品を読むことで、これまで個別に論じられてきた宗教やトラウマの諸要素を横断的に結びつけることができる。時間は日々の生活を支配するだけでなく、死後の世界への想像を促したり、死者に思いを馳せる契機となったりもする。「ガラス家の物語」において、時間は登場人物たちの精神世界と深く絡み合い、彼らの言葉や生き方を形作っているのである。

司会 鹿児島大学教授 竹内 勝徳

2. 19 世紀アメリカの初期大学小説群——規律に従わない学生たち

(招待発表) 九州工業大学教授 大野 瀬津子

ジャンルとしての大学小説 (college novel, campus novel) がアメリカで人気を博し始めたのは、南北戦争開戦の頃とされる。しかしアメリカの大学生を主人公とした小説自体はホーソーンの『ファンショール』 (1828) を嚆矢として、南北戦争前まで断続的に出版されていた。1820 年代から 1860 年頃までのニューイングランド

のキャンパスは、精神面や道德面などの内的な「規律」(discipline)や学則などの外的な「規律」(discipline)で学生の行動を縛ろうとする教授陣と、フラタニティやクラブを組織し独自の規律を作って教授陣に反抗する学生集団とが対立する場だった。当時の空気を反映した初期大学小説群では、各種の規律を破ったりそれらから距離を置いたりする学生が主要登場人物の一角を占めている。本発表では、そうした規律に従わない学生たちの行為が秘める可能性を各小説から導き出し、21世紀日本のアカデミア内外で活動する研究者へのエールとしたい。

第 3 室 (共通教育棟 1 号館 124 号教室)

司会 宮崎公立大学教授 福田 稔

1. tough 構文における基底生成分析の再考

九州大学大学院修士課程 知京 健真

tough 構文がどのように派生されるかについては今でも論争を呼んでおり、その立場は大きく2つに分かれている。すなわち、主節の主語が埋め込み節の目的語の位置から移動して tough 構文が派生されるという立場 (Rosenbaum (1967), Postal (1971), Hicks (2009)) と、tough 構文の主節の主語は基底生成だという立場 (Ross (1967), Chomsky (1977), Keine and Poole (2017)) である。Poole et al. (2024) は、tough 構文の主節の主語が再構築できないことを根拠とし、それが基底生成であると分析している。一方、Hartman (2012) によると、(1) のように、Experiencer の PP を含む tough 構文は非文法的である。

- (1) a. Cholesterol is important (* to Mary) to avoid.
b. Strawberries are enjoyable (* to John) to eat.
c. John is annoying (* to those boys) to talk to.
d. Sugar was very hard (*on me) to give up. (Hartman (2012: 87))

これは、PP が介在することによって主語の A 移動が阻止されているためだとされている。これは、従来の基底生成分析でとらえることは困難である。本発表では、基底生成分析の立場を採り、このような現象がどのようにとらえられるかを議論する。

2. ボックス理論と θ 位置

九州大学准教授 大塚 知昇

東京理科大学准教授 菅野 悟

中部大学講師 田中 祐太

藤田医科大学准教授 近藤 亮一

Chomsky (2024)は、強い極小主義テーゼ (Strong Minimalist Thesis)の想定のもと、ボックス理論 (Box Theory)を提案した。本研究では、まず最新のボックス理論に至るまでの経緯を概観し、ボックス理論の概要を提示する。その後、ボックス理論における付加詞の扱いを検討し、現状のボックス理論では問題となることを示す。また、Blümel and Goto (2024)や中島 (2025)の理論的な問題点を指摘する。これらの分析では付加詞について論じているが、 θ 役割付与を統語部門で「見る」必要が生じ、一種の「先読み」が仮定されている。本研究では、このような問題を回避するため、直接外的併合 (Immediate External Merge)に基づいた分析を提案する。最後に、この提案を経験的に補強するために、通常であれば「 θ 位置」として解釈される統語的位置でも、実際にはインターフェイスでそのように解釈されない可能性があることを示し、付加詞の島の例外や、二重目的語における間接目的語からの抜き取りの不可能性などを説明する。

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」(総合教育研究棟 203 講義室)

百年後の今、ヴァージニア・ウルフを読み直す

司会・講師 九州大学教授 鶴飼 信光

講師 福岡工業大学教授 原田 寛子

講師 北九州工業高等専門学校講師 原田 洋海

講師 福岡大学准教授 岩崎 雅之

ヴァージニア・ウルフ (1882-1941) の中期の代表作『ダロウェイ夫人』は、今年で出版百年になる。そのことをきっかけとして、このシンポジウムでは、『ダロウェイ夫人』や、同じく中期の『灯台へ』、また、ウルフの『波』を下敷きにしていると考えられる現代作家サマンサ・ハーヴェイ (1975-) の2023年の作品『オービタル』

を取り上げながら、代表作の出版後百年がたった現代におけるウルフの作品の意義を、老いとジェンダーによって二重に弱者となる老齡女性と社会制度、登場人物や語り手の想像とコミュニケーションの問題、100 年前にも問題となっていた人間の活動が地球環境へ及ぼす強大な影響力、ほぼ 100 年の世代差のあるウルフとハーヴェイが作品で描く（疑似）家族像などの観点から考察していきたい。

女性の老いと名もなき人々への想像力

原田 寛子

ヴァージニア・ウルフは『ダロウェイ夫人』執筆の際に、この作品のなかで生と死、正常と狂気を描き、社会制度を痛烈に批判したい、と日記に記している。この作品が批判しようとする社会制度と関連する問題——戦争や男性中心社会、ジェンダーや階級、人種の問題——は、出版後 100 年を経た現在においても未だに解決できない重要な課題であると言える。そのような問題のなかで、高齢化が進む現代社会においては、年齢から生じる差別や格差も解決されるべき、また批判されるべき問題としてとらえることができるだろう。とりわけ、女性の権利を主張したウルフの思想は、ジェンダーと年齢によって二重に弱者となる女性の老いという問題を考えるうえで重要な手がかりとなるだろう。人生の後半に入り、老いを意識する 52 歳の主人公クラリッサ・ダロウェイを通じて、この作品が批判する社会制度を考察し、ウルフの他の作品に登場する老女の存在やその意義に言及しつつ、批判されるべき社会制度に対してウルフが提示する名もなき人々への想像力の可能性を確認したい。

『ダロウェイ夫人』における想像とコミュニケーション

鶴飼 信光

『ダロウェイ夫人』の冒頭近く、通りを横切りながら、主人公クラリッサが、人がいかに life を愛し、一瞬、一瞬、それを新たに作り上げ（create）ているかと思う一節がある。そこでは imagination という語は使われていないが、人々の創造は「想像力」による「創造」と捉えることができるだろう。『ダロウェイ夫人』は、他にも、多くの登場人物の想像を印象深く描いており、また、語り手自身が、ピーター・ウォルシュが公園のベンチで、子守の女性のそばで居眠りをする様子に触発された想像を、約 2 ページにわたって述べる一節もある。その一節は、語り手が自らの想像を読者に伝えることの意味、ひいては、作者が想像力によって作品を書き、読者に届けることの意味の考察へ私たちを駆り立てる。陰謀論など、想像力の悪しき発揮が、分断というコミュニケーションの断絶を世界で生んでいる中、『ダロウェイ夫人』が提示する想像とコミュニケーションの問題を考察したい。

人新世に読み直す『灯台へ』

原田 洋海

近年、「人新世」（Anthropocene）——人間の活動が地球に深刻な影響を及ぼしているとする地質学的な時代区分——の概念が、鍵語としてモダニズム文学の研究にも盛んに援用されている。ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』（1927）もまたその一例である。この文脈において、三部構成である本作の特に第二部「時はゆく」は、ほとんど完全に人間が舞台から退場した非人間的世界を描いているだけでなく、ポストアポカリプス的世界をも

連想させるセクションとしてしばしば論じられている。人新世の諸問題は 21 世紀だけでなく、科学技術の発展に伴う大規模な環境の変化を経験した 20 世紀初頭においても重大な問題であり、とりわけウルフはそれに意識的であった。本発表では、今から約 100 年前に書かれた『灯台へ』を、第二部だけでなく作品全体を通して読み直し、動物をはじめとする自然描写、そしてそれらに対する登場人物たちの反応に着目することで、文明/自然、人間/動物という二元論に収束しない、より多角的なウルフの視点を検証する。

宇宙時代におけるウルフとアダプテーション

岩崎 雅之

マイケル・カニンガムが『めぐりあう時間たち』(1998)において、ヴァージニア・ウルフを主要登場人物の一人として登場させて以来、ウルフ本人を登場させるバイオフィクションの類と、現代作家による彼女の翻案作品が多数登場している。2024 年にブッカー賞を受賞したサマンサ・ハーヴェイの『オービタル』も、このような作品の一つとして考えられるものだろうか。この作品は、ウルフの『波』(1931)を彷彿とさせる、6 人の宇宙飛行士の内面をモノローグで綴った物語であり、彼らが国籍や文化的差異を越え、「漂流家族」と形容される特異な人間関係を宇宙空間において形成していくことに特徴がある。宇宙開発にかかわる 6 人の人間模様が擬似的な家族関係に置き換え、作中でウルフの名前に言及しながら彼らの内面をモダニズム的手法によって描き出すことには、どのような文学的意義があると言えるのだろうか。『波』と『オービタル』の共同体意識を比較しながら、英語圏文学において変容していく家族像の実態解明をセクシュアリティ、戦争、SF の観点から複眼的かつ多層的に分析することを目標とする。

第 2 部門「アメリカ文学」(共通教育棟 1 号館 125 号教室)

可視／不可視のナラティブ

司会・講師 琉球大学准教授 小林 正臣

講師 西南学院大学教授 藤野 功一

講師 九州工業大学准教授 鈴木 一生

講師 順天堂大学助教 河野 世莉奈

2025 年の MLA 会長テーマは“Visibility”であった。特筆すべき主張は、トニ・モリスンのエッセイ“*Invisible Ink: Reading the Writing and Writing the Reading*”における「見えないインク」とは、種々の言説が表明される場合に適用できる広範なメタファーであり、そうした言説に隠された何かを見えるようにするのが人文学の課題ということである。なるほど、およそ語るという行為には、それが言明する行為である限り言明されなかったこと、すなわち不可視が潜在している。このように、語りの背後にあるものを前景化することが文学研究の可能性を広げるとすれば、それこそが本シンポジウムの主眼である。ここで目指されるのは、さまざまな語り手のナラティブに潜む問題系を顕わにすること——いうなれば「見えないインク」を読み取ることである。議論の対象となるのはハーマン・メルヴィル、ジャック・ロンドン、ウィリアム・フォークナー、そしてモリスンの作品における

ナラティブであり、それらに内在する不可視の可視化を試みる。ナラティブをめぐる可視／不可視の諸問題に注目しながら、文学研究の可能性を探っていきたい。

三人称全知を問う——思弁的なナラティブとしての「火を熾す」

小林 正臣

ジャック・ロンドンの代表作の一つである「火を熾す」(1908)は、いわゆる三人称全知(third-person omniscient)の視点によるナラティブである。語り手は、主人公である男ひいては男が連れる犬の内面にも入り込む一方、両者を取り巻く極北の外界から事物を俯瞰することで、まさに第三^{サード・パーソン}の人物として作中に遍在している。しかし、遍在であるから全知であるということはどのように知れるのだろうか。このように前提を問い直すことで、本発表は三人称全知とされるナラティブに潜む不可視の可視化を試みる。具体的には、タイトルでもある火を含めた個別の対象を巨視的かつ微視的な——すなわち複眼的な——視点から考察することで、語り手をどのように捉え直し、この人物の全知をどのように推し量ることができるのかに迫っていく。このアプローチが示すように、三人称全知を問うことは思弁的に問うことでもあり、そうすることでナラティブが秘める新たな可能性を探りたい。

「誰かが俺を撃ちやがった！」——フォークナーの『館』における不可視の主体

藤野 功一

ウィリアム・フォークナーの長編小説『館』の第十四章では、オーティス・メドウフィルとオレステス・スノープスのあいだで隣接する土地の争いが高じて、メドウフィルがいつも陣取っている部屋に 22 口径の弾丸が撃ち込まれるエピソードが描かれる。「誰かが俺を撃ちやがった！」とメドウフィルは叫ぶが、実際には巧妙な仕掛けに豚がひっかかり、それに応じて弾丸が発射された事実が明らかになる。だから弾丸を撃ったのは誰でもない、検事ギャヴィン・スティーヴンズが言うように、それは「豚がやった」ということになるが、しかしその真実が何を解決するわけでもないだろう。「真実になんぞ全く興味はない」とうそぶくスティーヴンズが実際に心を砕くのは、「そうして出た答えに自分が関わる価値があるかどうか」という点だ。こうして、誰が弾丸を撃ったのか、という問いは、スティーヴンズの手によって、豚の不定形な働きに特定の目的を遂行させる不可視の主体に、いかにして社会的に価値ある役割を付与しうるかという問いに変換される。今回の発表では、フォークナーの『館』における不可視の主体はいかに社会的に可視化されるか、そしてそれは作者フォークナーのどのような価値体系に結びつくかを論じてみたい。

メルヴィルの「見えないインク」——「ベニート・セレーノ」における表層と深層の視点から

鈴木 一生

探しているものが明らかに目につくがゆえに却って見えなくなる現象は、エドガー・アラン・ポーが「盗まれた手紙」で用いたトリックとしてあまりにも有名である。しかし、ハーマン・メルヴィルもまた、同様の内容に興味を抱いていたようだ。本発表では、マイケル・T・ギルモアによる *Surface and Depth* (2003) の第 4 章 “The Nineteenth-Century Canon: Hidden in Plain Sight” を手掛かりに、表層と深層を共存させるためにメルヴィルが取っ

た文学的戦略について議論していく。その際にまず検討すべきことは、知性を象徴する法の役割である。メルヴィルは、「ベニート・セレーノ」(1855)に限らず、法が真実を覆い隠す様子を繰り返し描いている。だとすれば、メルヴィルが目指したのは、表層と深層の分断を招く法のレトリックを乗り越える文学的手法、つまり、可視と不可視を曖昧化させるナラティブの習得であったはずだ。こうした語りの技術について、「ベニート・セレーノ」を中心に複数の作品を横断して論じることで、本シンポジウムのキーワードであるトニ・モリスンの「見えないインク」とメルヴィルの創作論が共鳴する地点を明らかにしたい。

「隠されたものを見つける」——「レシタティフ」における不可視の語り

河野 世莉奈

トニ・モリソンは読者のナラティブへの関与の重要性を、“invisible ink”という言葉を使って主張した。彼女は読者に、「行の下、間、外」といった場所に隠されたものを見つけることを求める。さらに注目すべき点は、モリソン自身がこのような創作手法を、すべての作品において意図的に行っている、と明言していることである。

そのことを踏まえて本発表では、モリスンの唯一の短編小説「レシタティフ」(1983)を扱う。本作品はモリソン本人が述べているように、「すべての人種的コードを取り除いた実験的小説」である。しかし、主人公の2人が“salt and pepper”と例えられるなど、どちらかが白人でどちらかが黒人であるという「手掛かり」は提示されている。とはいえ、本作品のテーマは、人種問題ではなく長編小説群と同様、娘の葛藤、母との確執、にあると言えるだろう。物語は主人公のうちの1人の語りにより進行するが、彼女の記憶にはときに曖昧なところがあり、語り手としての頼りなさが度々露呈する。彼女の語りにより不可視となるもの、作中に散りばめられた要素を浮き彫りにしながら、本作品に描かれた娘／母の葛藤を考察してみたい。

第3部門「英語学」(共通教育棟1号館124号教室)

言語研究における多因子研究

司会・講師 北九州市立大学准教授 木山 直毅

講師 桃山学院大学准教授 森下 裕三

講師 東京農業大学助教 徳永 和博

理論言語学では、構文交替や言語変異に関する研究が盛んに行われてきた。複数の言語形式が交替する要因については、これまでさまざまな観点から議論されてきた。しかし、コミュニケーションには言語内的・外的な文脈が多く関与するため(例: Clark, 1992; Fetzer, 2004)、変異の選択には多くの要因が複雑に関与していると考えられる。すなわち、構文交替の背景を明らかにするにあたっては、どのような状況でどの要因が、どの程度の影響力を持つのかを解明する必要がある。また、さまざまな要因が関与することにより、変異選択には確率的な側面が生じると考えられる(Lohmann, 2011; 渋谷, 近刊)。本シンポジウムでは、「変異」をキーワードとし、多因子的アプローチが理論言語学に与え得る示唆について議論する。また、AI技術を含む分析手法や研究上の課題についても共有する。定量的研究に不慣れな研究者にも実践的知見を提供することを目指す。

英語における移動表現と変異

森下 裕三

移動表現はあらゆる言語にみられることから、さまざまな観点から分析が進められている。このような研究のなかには、移動事象の構成要素のうち、どの要素が動詞によって語彙化されるのかという点に注目したものがある (Talmy, 1985)。移動事象を構成する要素には、移動 (Motion)、様態 (Manner)、経路 (Path) などがあり、直示性も経路の一種だと考えられている (Talmy, 2000, p. 53)。本研究では、英語の移動表現において、どの要素が動詞によって語彙化されるのかという点に注目し、経路のうち直示性が語彙化される場合 (e.g. *come*, *go*) と様態が語彙化される場合 (e.g. *walk*, *stagger*) とを変異と捉える。Levin (1993, pp. 265–266) および Slobin et al. (2014, p. 717) によって共通してあげられている様態が語彙化された動詞に *come* と *go* を加えた計 54 種の動詞のいずれかが生起し、かつ物理的な移動をあらわす例を Corpus of Contemporary American English (COCA; Davies, 2008-) から収集したものを分析対象とした。これらの例から、経路句、主語名詞句、レジスターなど複数の要因が移動動詞の変異の選択に与える影響を検証する。

非標準的な補文現象を多因子的分析から探る

徳永 和博

本発表では、通常 *that* 補文を取らない表現 (*be raised*, *be brought up*, *grow up*, *be born*) が *that* 補文を取る事例を取り上げ、構文選択に関わる要因の相互関係を検討する。これらの構文は、*say* や *think* といった思考・伝達動詞、前置詞が省略されることで *that* 補文を取るようになった動詞 (*care* など)、あるいは伝達動詞化した自動詞 (*nod* や *wink* など) などとは異なり、*that* 補文を取るとは一般的に認識されていない。しかし、低頻度ながら実際に *that* 補文と共に用いられる用例が確認される。本発表では、Corpus of Contemporary American English (COCA; Davies, 2008-) などの大規模コーパスから用例を収集し、近年認知言語学やコーパス言語学で注目されている「多因子的な分析手法」を用いて、この使用実態を調査する。分析を通じて、構文選択における複数要因の相互作用を明らかにする。本研究を通じて、多因子的な分析が英語語法・文法研究においても有効であり、構文使用における背後の要因にどのように作用しているのかを可視化できる点で記述的な研究にも有用であることを示す。

分離不定詞をめぐる語順選好と規範意識の変遷

木山 直毅

分離不定詞 (例: "*to boldly go*") は、英語の規範文法において長らく忌避されてきた (e.g., Neely, 1978)。しかし近年、その使用頻度が増加し、再評価が進んでいる。また、20 世紀末以降のコーパス研究の進展により、分離不定詞の使用には話者の性別や副詞の意味的特性など、さまざまな言語内外の要因が関与することが指摘されている (Close, 1987; Calle-Martín & Miranda-Garí, 2009)。しかし、これまでの研究は記述的分析にとどまり、他の語順との比較検討は十分ではない (Gonzales, 2023 と Kostadinova, 2020 は重要な例外)。そのため、分離不定詞に影響を与えるとされる要因が分離不定詞に特有のものか否かは未解明である。本研究では、British National Corpus (BNC) 1994 年版から、分離不定詞と意味的に同等の構文 (例: *to boldly go*, *to go boldly*, *boldly to go*) を

抽出し、多項ロジスティック回帰を用い、語順選択に影響する要因とその影響力を特定する。さらに、BNC 2014 年版と比較することで、過去 20 年間における使用傾向の変化について議論する。

〈第1日〉10月26日（日）

研 究 発 表

第 1 室（総合教育研究棟 203 講義室）

司会 志學館大学准教授 高根 広大

1. 2024-2025 年シーズンにおけるシェイクスピア上演史（翻案を含む）——色彩のもたらす効果を中心に

鹿児島大学大学院博士前期課程 塗木 さくら

本発表では、2024～2025 年に日本で上演・上映された四作品——『リア王』、『ハムレット』、『天保十二年のシェイクスピア』、『朧の森に棲む鬼』——を取り上げ、「色」が登場人物の心情や主題表現にどのように関わっているかを考察する。『リア王』では、コーディリアの終始一貫したピンクの衣装が純粋性と意志の強さを象徴した。『ハムレット』では、色調の対比やスローモーション演出が主人公の精神変化を色と光で強調した。『天保十二年のシェイクスピア』では、演出家による色彩の違いに加え、ガラス張りの舞台装置が観客自身を映し出し、物語を「自分事」として捉えさせる効果を生んでいた。『朧の森に棲む鬼』では、血や水といった液体モチーフに加え、歌舞伎的衣装が虚構性や権力性を視覚的に強調していた。これら四作品を比較しながら、「色」とその象徴的・感情的効果を分析し、視覚表現が現代日本のシェイクスピア上演にどのような新しい意味を与えているのかを明らかにする。

司会 宮崎公立大学准教授 村上 幸太郎

2. 「石を投げつけられた」者たちによる逆襲——フェイギン、スクルージ、クウィルプにみるディケンズ文学における「ザアカイ表象」から浮かび上がる群集心理

北九州市立大学大学院博士後期課程 内屋敷 強

本論では、伝統的なユダヤ人観、すなわち収税や金貸し業に従事し、弱いものから搾取し、キリスト教社会から忌み嫌われ、その周縁で生きることを余儀なくされ、差別されてきた人々というイメージを、聖書に登場する収税人ザアカイのエピソードから再検討し、文学作品で用いられる類似した主題を「ザアカイ表象」と定義する。そのような「ザアカイ表象」が、例えばディケンズの『骨董屋』（*The Old Curiosity Shop*）に登場する悪名高

い金貸しクウィルプ(Quilp)を通じて表されていることを指摘する。さらにそのモチーフが、一方向的で差別的なユダヤ人観を読者に喚起する起爆剤として利用されつつも、その差別意識を強化することよりは、むしろむき出しの差別意識で他者を見ていた大衆、あるいは読者を、逆に見られる立場へと引きずり込み、大衆から蔑まれた者たちと同じ痛みを味わわせる装置として機能していることを指摘する。

司会 宮崎産業経営大学教授 安井 誠

3. ブルームがモリーの朝食を作るのはなぜか——ケルト神話から読み解く『ユリシーズ』

(招待発表) 宮崎大学准教授 新名 桂子

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』(1922)における魅力的な謎の一つに、主人公レオポルド・ブルームが妻モリーの朝食を作るのはなぜかということがある。従来、この夫婦はかかあ天下ということになっており、ブルームは妻の尻に敷かれた情けない夫であるとの解釈が優勢である。この点について、マリア・タイモスコは *The Irish Ulysses* (1994)の中で『ユリシーズ』にケルト神話の影響があることを鮮やかに論じるが、その上で本小説はその出版年に成立したアイルランド自由国への誕生祝いなのだとも言う。本発表では、冒頭の問いを出発点として、『ユリシーズ』とケルト神話とアイルランド自由国のつながりを踏まえつつ、ジョイスが『ユリシーズ』を書いたことの意味をさらに深く掘り下げることにしたい。

第 2 室 (共通教育棟 1 号館 125 号教室)

司会 九州共立大学教授 黒木 隆善

1. ECM 補文節における統語的構造の問題について

九州大学大学院修士課程 中山 凌太

本発表では、例外的格標示構文(以下 ECM)における補文が、どのような統語構造を持つかについて考察を行う。ECM は補文に CP または TP をとると考えられているが、そこでは ECM 動詞によって節境界を越えて格付与がおこなわれる。

(1) She believes him to be honest.

さらに補文節主語は主節の他動詞に格付与されるために、主節まで object raising していると考えられる立場がある(Poole (2021), Lasnik (2003))。以下はその根拠とされており、相互代名詞及び R-expression の束縛からそれが観察

される。

- (2) a. The DA proved [two men to have been at the scene] during each other's trials.
b. *The DA proved [there to have been two men at the scene] during each other's trials. (Lasnik (2003, 33))
- (3) a. The DA proved [noone to be at the scene] during each other's trials.
b. *The DA proved [there to be noone at the scene] during each other's trials. (Lasnik (2003, 33))
- (4) a. *Joan believes [him to be a genius] even more fervently than Bob_i does.
b. Joan believes [he is a genius] even more fervently than Bob_i does. (Lasnik (2003, 35))

これらの事実を踏まえ、本稿では、言語現象に重点を置いたうえで、ECM においても CP を選択することができるのではないかという想定を視野に入れ、上記の問題、及び理論的枠組みとその統語構造について詳細に考察を進めていく。

司会 産業医科大学准教授 田中 公介

2. 重名詞句転移における前置詞残留禁止の問題について

九州大学大学院修士課程 平野 湧久

本発表では、重名詞句転移(以下 HNPS)が前置詞句の目的語への適用を禁止されている事象に関して、右方移動限がもたらす一般的な制約を踏まえて議論を展開する。とりわけ HNPS と wh 移動の非対称性について考察を行う。

- (1) a. John looked at [the woman that he loved] very often.
b. *John looked at ti very often [the woman that he loved]_i.

(Koster (1987, 279), slightly modified)

この例は前置詞 at の目的語に HNPS を適用されている例であるが、非文法的である。一方、同じく at の目的語に wh 移動を適用する場合、これは文法的となっている。以下に(1a)の文に対して wh 移動を適用した例を示す。

- (2) Whati did John look [at ti] very often?

こうした右移動に限定的な制約の問題について、本発表は HNPS の再構築に関する議論を踏まえて理論的な枠組みを考察する。wh 移動と HNPS の非対称性を軸として、Larson (1988)で提案された VP-Shell の分析による観点に加えて、再構築に関係する LF での振る舞いも視野に、HNPS が前置詞の目的語に適用できない原因について解決を試みる。

3. 日本語の終助詞ワと英語の非標準的動詞 s 標示が持つ談話的意味と社会的意味——終助詞と屈折標示のカートグラフィー分析

(招待発表) 西南学院大学教授 谷川 晋一

本発表では、日本語の終助詞ワと英語の非標準的動詞 s 標示に焦点を当て、その談話的・社会的意味について、カートグラフィーの観点から接近を試みる。まず、遠藤 (2010) 等に従って、日本語の終助詞ワが話者の心的態度に関わる機能主要部に生起する分析を提案する。この分析を用いて、「それ素敵だわ」「今から行ってくるわ」のように、上昇調と非上昇調の2種類が存在すると言われている終助詞ワの考察を行う。当該助詞が持つ談話上の意味機能とジェンダーに関連する社会的意味を、音声特徴にも結びつける形で、どのように導くことができるかについて、カートグラフィーの観点から議論する。加えて、当該分析をカナダ・ニューファンドランド地域の英語変種で観察される “I loves you.” のような特異な動詞 s 標示にも拡張する。日本語の終助詞ワと類似した社会的意味を持つと言われている当該 s 標示について、英語の仮定法現在や祈願文等で観察される動詞の屈折形態も考慮に入れながら、カートグラフィーの観点から考察を行う。

第 3 室 (共通教育棟 1 号館 124 号教室)

司会 産業医科大学講師 下仮屋 翔

1. 分詞構文の統語的意味的分類に関して

九州大学大学院修士課程 永松 尚子

本発表では、分詞構文の意味的解釈の違いは、その階層構造の位置の違いに関連していると分析する。分詞構文を以下のように分類する。

(1) a. Walking home, he found a dollar.

(時) (Williams (1975))

b. He remained in town, his idea being that he wanted everything settled before his departure.

(付帯状況) (Jespersen (1940))

c. Wearing that new outfit, Bill would fool everyone.

(条件) (Stump (1985))

d. Weighing only a few tons, the truck might reach the top of the hill.

(理由・原因)

(Stump (1985))

(1)に示すように、分詞構文は、「時」、「付帯状況」、「条件」、「理由・原因」という、主節で言い表された出来事に対する様々な意味関係をもつ。この意味解釈は分詞構文の生起する位置に依存していると考えられる。

(2) a. Driving to Chicago that night, I was struck by a sudden thought.

b. Driving to Chicago that night, a sudden thought struck me.

(Quirk et al. (1985))

また、(2a)のように分詞構文の意味上の主語が、主節主語と同一指示を得る場合と、(2b)のように主節主語ではない要素の解釈を得る場合がある。

上記に記したような分詞構文の特徴を、統語的、意味的な分析を用いて理論的な説明を与えていく。

司会 産業医科大学講師 下俣屋 翔

2. 対格動名詞の格付与について

九州大学大学院修士課程 白木 佳帆

本発表では、英語における対格動名詞の統語構造に関して、対格動名詞節が非顕在的に名詞化されていると考え、節と節内の主語に対する格付与について考察する。対格動名詞は TP や CP といった節の構造を持つと考えられている。一方、CP である定形節と対格動名詞は(1)で示されるように異なるふるまいをする。

(1) a. * Mary talked about [(that) John moved out/ John to move out].

b. Mary talked about [John moving out].

(Pires (2006: 21))

(1a)から定形節は一般的に格位置に生起せず、(1b)からは対格動名詞が格位置に生起することがわかる。この対比について、Kastner(2015)の Selected Embedded Presuppositional DP complements に対する分析を対格動名詞に適用可能か検討し、対格動名詞は非顕在的な DP によって導かれる構造を持つと仮定し、格位置に現れると主張する。また、対格動名詞節内の主語が対格で標示される理由についても上記の仮定をもとに議論する。

3. 学習者による学習アプリ開発を通したアクティブラーニング

九州ルーテル学院大学講師 山本 幹樹

九州ルーテル学院大学 4 年 田中 聖和

九州ルーテル学院大学職員 田中 健久

本研究は、学部生が中心となつて行うオンライン英語学習ツール開発の試みと、その過程で培われる課題解決能力やアクティブラーニングの実践について分析・考察するものである。IT 革命以降、英語学習はデジタル化が進み、CALL の発展により多くの大学で e-learning が導入されている。発表者の大学では文理融合教育の一環として 2023 年度よりデータサイエンス科目を必修化した。今後英語力とプログラミング能力を兼ね備えた人材育成も可能となる。学生は語彙学習を中心に、自らの英語力向上を目的としたアプリを設計し、視覚情報の活用や語彙・例文データベースの構築を行う。プログラミング面では AI やアプリ作成ツールを活用し、これらの活動全体がアクティブラーニングとして機能している。本発表では、これまでの成果について報告する。

特 別 講 演 (共通教育棟 1 号館 121 号教室)

司会 鹿児島国際大学教授 小林 潤司

演題 シェイクスピアに於ける幻想と現実の問題——『冬物語』の affection を手がかりに

講師 東京大学教授 河合 祥一郎 (かわい しょういちろう)

講演内容

『冬物語』で主人公リオンティーズはなぜ突然嫉妬に駆られるのか。その一つの解答をスティーブン・グリーンブラットは、アダム・フィリップス共著『セカンド・チャンス』(河合訳、岩波新書、2025)で示した。『冬物語』は『オセロー』のセカンド・チャンスなのだとするグリーンブラットの解釈を参照にしながら、本講演では、シェイクスピア作品群全体に関わる「現実よりもリアルな幻想」の問題について掘り下げていきたい。

マクベスが言う「目の前にある恐怖など、恐ろしい想像と比べたら大したことではない」という台詞の真意はど

うということなのか？手がかりは、『冬物語』のリオンティーズの台詞にある——「情念 (affection) は、その激しさは、芯を貫く。／ありえないはずのものを可能にし、／夢と語り合う」。この語 affection はこれまでさまざまに解釈されてきたが、この語の原意「心の中で起こること、心的状態 (a mental state)」で解釈したアーデン3版に基づき、新たな解釈を試みてみたい。そうすることで、マクベスを感じた恐怖が、オセローの卒倒、リオンティーズの *tremor cordis* (動悸) へとつながっていく。

シェイクスピアが舞台上の絵空事である演劇に一生を費やした理由が、少しでも見えてくればよいと思っている。

講師紹介

東京大学大学院総合文化研究科教授。2001年に『ハムレットは太っていた！』でサントリー学芸賞を受賞。自身が主宰する Kawai Project ではシェイクスピア戯曲の新訳・演出を手掛け、作・演出の『ウィルを待ちながら』は2022年シビウ国際演劇祭に招聘された。角川文庫から、シェイクスピアの新訳のほか、『ポー傑作選』シリーズ、『赤毛のアン』シリーズ、オスカー・ワイルド『サロメ』『ドリアン・グレイの肖像』、チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』など刊行。

主著書：『謎解き『ハムレット』——名作のあかし』（ちくま学芸文庫、2016）、『シェイクスピア——人生劇場の達人』（中公新書、2016）、『シェイクスピアの正体』（新潮文庫、2016）、『シェイクスピア ハムレット 悩みを乗り越えて悟りへ』（NHK100分de名著ブックス、2022）など。

主共著書：『*The Routledge Companion to Directors' Shakespeare* (2008)、『*The Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare* (2016)、『*The Routledge Handbook of Shakespeare and Interface* (2022)』